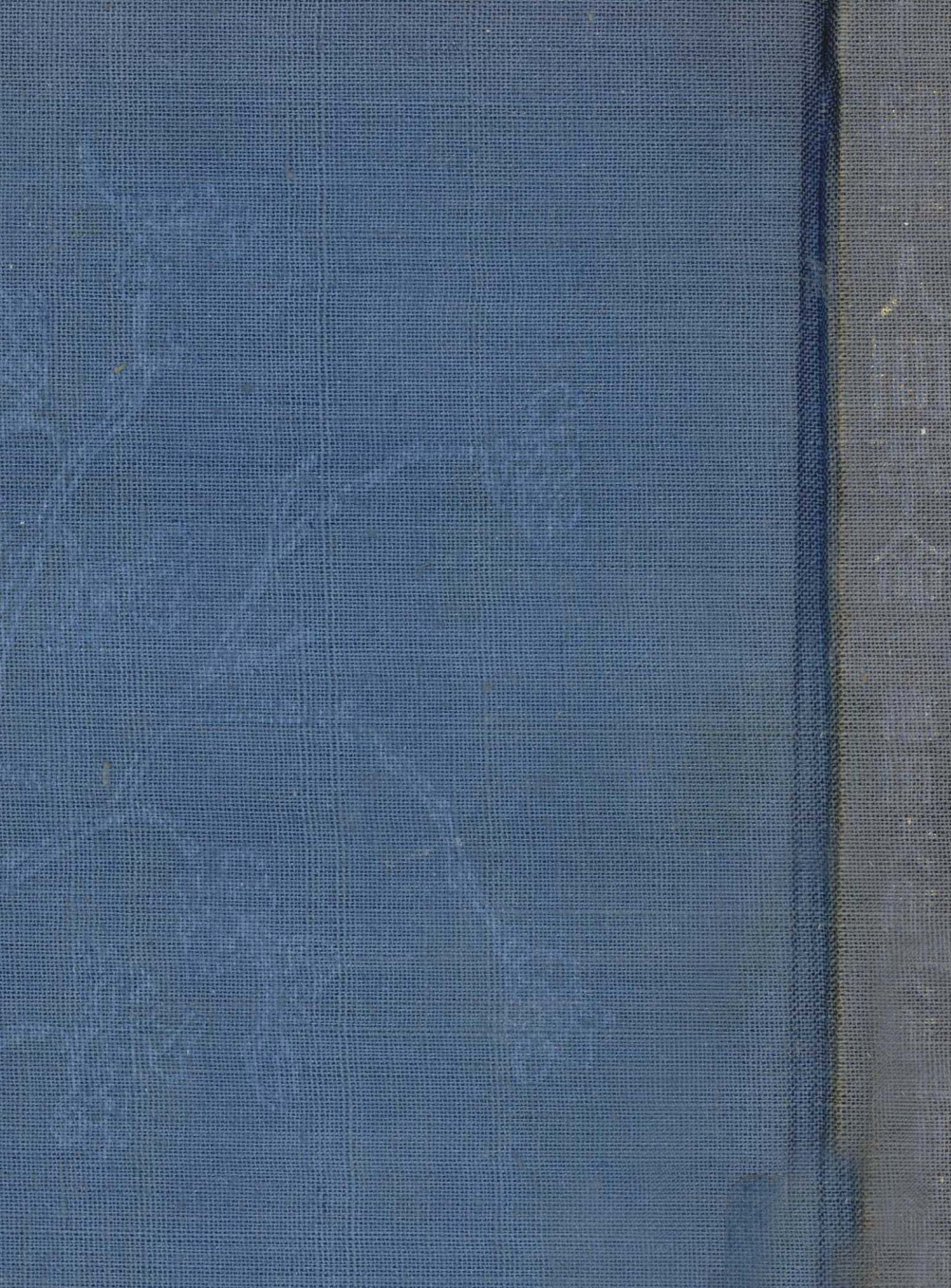




隨筆人間革命

池田大作



著者略歴

昭和3年1月2日、東京都に生まれる。

富士短期大学経済学科卒業。現在、創価学会会長、創価学会インタナショナル会長、日蓮正宗法華講総講頭。

昭和22年8月、19歳のとき創価学会に入会。以来、第二代戸田城聖会長に師事。昭和33年6月、創価学会総務。昭和35年5月、創価学会第三代会長に就任。

主な著書、「人間革命」(第1巻～第9巻)、「生命を語る」(第1巻～第3巻)、「若き友へ贈る」「詩集 青年の譜」「家庭革命」「婦人抄」「わたくしの随想集」「私の人生観」「私の仏教観」「創造家族」「御義口伝講義」上・下、「二十一世紀への対話」上・下(共著)他。

随筆 人間革命

発行日 昭和五十二年五月三日

著者 池田 大作

発行者 美坂房洋

印刷所 凸版印刷株式会社

製本所 牧製本印刷株式会社

発行所 聖教新聞社

〒一六〇 東京都新宿区信濃町十八

電話〇三―三三三―六一一(大代表)

* 定価はケースに表示してあります

落丁・乱丁本はお取り替えいたします

Printed in Japan ©1977

序にかえて

さる三月二十三日の午後、本部の広宣会館で、第二代会長戸田城聖先生の、胸像除幕式が晴ればれと行われました。

除幕の紅白の紐^{ひも}をひいたのは、日本とイギリスとフランスの、三人の若竹のような女子部員でありました。会場には、日本の多くの幹部と、はるばる春季研修会のために来日していた、ヨーロッパ十数か国の数百名の同志が参加していました。幕が払われたとたん、戸田先生の胸像の慈眼は、丸い眼鏡^{めがね}の奥から、私ども一同を見たのであります。頬^ほは

心なしか微笑でゆるみ、——みんな、よくやったな……、と口がほころび、破顔大笑する先生の声さえ、聞こえんばかりでありました。

除幕の紐をひいた三人の若い女性たちは、当然のことではあります。が、先生の生前のお姿も、^{けいがい}聲咳も知りません。しかし、彼女たちに祖父があるように、妙法の師弟の道において、戸田先生は、まさしく彼女たちにとって、慈愛あふれる祖父であることはたしかです。先生^{ちゆう}逝いて十九年、彼女たちのように、先生の生前を知らない子や孫や曾孫が、この日本をはじめ、この地球上の世界の各地、八十数か国にわたって涌出したところでもあります。先生の胸像は、それをじっと見守っていてくださる。私の今日この頃の感慨が、どのようなものであるかは、人びとの想像にまかせる他に、私には^{すべ}術もありません。

胸像は、^あ在りし日の先生のお顔を、はじめて刻んだブロンズであります。私もここ十三年、崇高にして偉大な不世出の戸田城聖という全人格

の魂魄^{こんぱく}を、なんとしても現代の多くの人びとに伝え残そうと心を砕き、一字一字をもつて刻んでまいりました。それが拙著『人間革命』であり、いま第九巻まで辿り終わつたところであります。原稿にして四千数百枚を超えましたが、ひとえに私の非才^{ひさい}のゆえでありましょう、わが胸中になおありありと生きている先生の、すべてを語り尽くすことにおいて、まことにいたらぬわが禿筆^{とくひつ}を、歎くのみであります。

物語の結構上、みすみす書きもらさなければならなかった挿話を惜しみ、私はこれまで折りにふれて随筆「人間革命」として書きついでまいりました。それもいつか一書となすまでの枚数になり、乞^こわれてこのたび、上梓^{じょうし}する運びとなりました。それがこの書であります。

この書をまとめたゲラ刷りを読んでも、語り尽くせぬ焦心は、年々いや増すばかりです。生得^{しょうとく}の日常となつた友との激しい対話の日々の折りおり、私はいつもそこに、戸田城聖先生の魂魄が、今もなお潑刺^{はつらつ}と鮮烈

に息づいていることを、友と友との顔に人知れず認めずにはいられませんが、それを悟るにつけても、私の焦心のじれったさは、書き進めばすむほど激しくなっています。

『人間革命』も久しく休載しておりますが、実は私の思索が休んでいるわけではありません。語り尽くせぬ焦心と事の重大さのために、深い思索の緊張を強いられているからです。事の重大さというのは、物語はいよいよ戸田先生の晩年、最後の二年半のところにさしかかってきたことです。この期間、先生は、正面から社会との対決にはじめて身を晒されました。そして身心の辛勞の果てに、今日のわが学会の根元の軌道を、確かに敷設してくださったのであります。この軌道に、己の死を覚悟した先生の最後の魂魄がこめられていることは、いうまでもない。この先生の魂魄を間近に拝した者の一人として、私はこの迫想におののきながら、思索はさらに思索を呼んで今日に及びました。

しかし、私もいつまでも歳月の流れに身をまかせてはおられません。先生の魂魄もまた、いよいよ私の執筆を促しています。私は近ぢか、勇気をふるって机に向かいます。勇気はいつの場合でも決意を生み、その決意の極まるところに、必死の祈りが生まれるはずです。この祈りこそ、戸田城聖先生の魂魄を文字に刻んで蘇^{よみがえ}らせる、唯一の活力であるにちがいありません。

昭和五十二年四月二日

戸田城聖先生二十回忌の日に

池田 大作

目次

序にかえて

寒椿

恩師の故郷・厚田村

若き名編集者たち

ペンネームの由来

挿し絵画家と“雑草”

陰の支え“校閲マン”

友への色紙

13

19

26

32

37

42

47

展览展示す四国文化祭

52

恩師の誕生日に想う

58

通説と真実の距離

63

真実を描く難しさ

69

通説排し真相を究明

75

仏法に結ばれた師弟

80

民族興隆の陰に歌

86

随縁の響きもつ和歌

93

“一冊の御書”に学ぶ

101

純粹な信仰の強さ

107

「永遠の都」と同志愛

113

沖繩広布の朝ぼらけ

ある会食の思い出

創刊20年の聖教新聞

嬉し沖繩の健在ぶり

乱世に光放つ鼓笛隊

新潟に咲く幸の花

恩師の指導ノート

至極の原点を偲んで

山本伸一の命名理由

盛り上がる新生の波

師の揮毫を指針に

186 179 172 164 157 151 144 138 133 127 120

総本山でのひと日	193
試練を越えてこそ……	200
未来を託す子供たち	206
恩師と過ごした師走	212
妙法広布の強靱な糸	219
名古屋の土地柄	225

装画・挿絵
三芳悌吉

隨筆
人間革命

寒 椿

朝日が二階に射し込む。

その二階の十畳間が、私の書斎である。私の家には、二十坪ほどの庭がある。その小庭園を、なによりも大切にしている。緑のない都会のなかでは、あたりまえのことであろう。

幾度か、もう少し広い庭があれば散歩でもできるのに、と思ったことがある。

しかし、今は、これで満足しきっている。

窓を開けると、幾輪かの、白い、赤い寒椿が、健気に咲いていた。

寒椿 四十の庶民の 鏡かな

沈丁花の蕾も、ふっくらと時を待っている。冬の朝の大気は、厳しく、爽やかに、一日の背景を貫く。

＊

『人間革命』の執筆も、早、七年になろうとしている。読み返すと、粗野な文で直したいところが多すぎる。恐縮のかぎり、胸が痛む。激しい法戦のなかでの、仕事であった。汗を流し、熱を出しながらの日も、多くあった。幾時間も横に臥し、考えの纏まらぬ時もあった。一筋に可能なかぎり真実を追って、ただ夢中に書いた。真剣に、挫折と戦う耕作にも似た頭脳労働であったことだけは、おわか